

『大学授業研究の構想 過去から未来へ』

京都大学高等教育教授システム開発センター編

三 浦 真 琴

今や全大学の4分の3以上が「学生による授業評価」を実施し、同じく全体の6割以上の大学がFD活動に取り組む時代である。大学の大半が、組織として授業を意識し、その改善を目指している。とはいえ、どのような評価を実施し、どのような活動を展開しているかに関しては、個々の大学によって異なるので、一様に論ずることはできない。ところが授業評価の結果を授業改善に役立てている、即ちFD活動と直結させている大学は全体のわずか27%にすぎない。この「取り組み」の広がりとは「効果的な活動」の希薄さとのギャップは、さしたる実態を伴わない「表向きの努力」の存在を物語っているというよりは、大学人の悩みや迷い、焦りを表していると捉えたほうがよい。

このような靄のかかったような改革ブームの中で、授業改善のための試みが静かに広がりつつある。授業評価の結果から改善のヒントを得ようとしている大学あるいは教員は確実に存在しているし、他の教員の授業を参考にしようとする動きも、もはや珍しいものではなくなりつつある。また、大学における教育実践報告・記録も出版されはじめている。

しかし、例えば、単に他の教員の授業を参観するだけでは、必ずしも自らの授業を改善するヒントが得られるとは限らない。多くの場合、学生による評価の高い授業がモデルとして公開され、参観の対象となっているが、

そこで得られるものは、発声や板書、視線の配り方といった基本的なことがら、導入のうまさ、挿話の巧みさ、スムーズな展開、時間配分の妙といった手際のよさ、あるいは学生の関心をひきつける話題の豊富さ、身近さなどの仕掛けあるいは創意工夫、場合によっては、遅刻者や私語への対応の様子等々、授業者なら大抵の場合、自然に目を向けるものである。いや、そのような「ものでしかない」と表現したほうがよい。

さらに多くの場合、上に挙げた各要素に対して、素晴らしい、上出来だと感銘を受け、賛辞を送るにとどまってしまう。感銘を受けたことによって、個々の教員に自分なりの創意工夫をしてみようというドライブがかかることはあっても、具体的にどのような工夫が、何故、効果的なのかということをおそらくは深く理解していない。

一般的な公開授業、授業参観に欠落しているのは、その時、参観した授業と同じものはこの世に二つと存在しないということに対する認識と、授業を参観する時にどのようなことに留意して観察すればよいのかという視点である。これが欠けているために、参観者の多くは漠然と「あの先生はいつも、あのようスタイルで授業をやっているのだろう」という感想を持ち、あるいは話題の豊富さを真似するべく意欲的に情報収集をしてみようと意気込んだり、導入を上手に施せば、その後

の授業がスムーズに流れていくと即断して「導入」案作成に精を出したりする。

ここに決定的に欠けているのは、その教員が、何故、どのタイミングで、何の話を導入なり話題転換のために用いたのかという蓋然性に対する眼差しと、それなりに定着したと思われるスタイルが、どのように編み出されてきたのかという経緯、歴史に対する好奇心である。

前振りが長くなってしまったが、ここに紹介する書物は、上に述べてきたように、いまだ十分ではない授業観察のための視点をどのようにしたら育てることができるか、というテーマに真正面から取り組んだ力作である。京都大学・神戸大学・大阪大学に勤務する大阪大学出身者がタッグをくんで取り組んできた「授業研究」（神戸＜大学授業＞研究会）の報告である。

このグループの研究スタンスは「はじめに」で明示されているが、以下に引用を交えながら、紹介者風に説明しておこう。すなわち『「一般的な授業法則を実証的に確かめる」ことは必要であるが、そこで得られる知見は「あまりに単純化され」ていて「無力」である。また多くの実践報告には「自己満足」的な記述が見られるが、それは「自己閉塞的な研究」にほかならない。このような認識に立って「個々の授業に流れる豊かな文脈」を最大限に重視し、「一事例を対象に研究をおこないながら」「一般理論のさらなる構築をめざそう」とする』スタンスなのである。実に地道で辛抱強さを要する作業であるが、これまでわが国の大学に欠落していた側面を見事に言い当て、それを克服しようとする壮大なプロジェクトであるといえる。

本書は「大学授業研究の過去」「大学授業研

究の現在」「大学授業研究の未来」の三部構成となっている。第一部には、これまで「教育と研究の対立」図式で捉えられていたことを「教育の論理 vs 学問の論理」というタームを使って、見事に描きなおし、さらに「学校化 vs 脱学校化」というアイデアも盛り込んだ刺激的な論文が収められている。全6編の論文はいずれ劣らぬ力作であるが、紹介者としては、第2章から第4章までの三本だけでもお読みいただき、授業参観の心得を身につけてほしいと願う。なお、第三部（第六章）は「総括」となっているが、この後に各章の執筆者から第六章へのコメントがつけられている。斬新なアイデアであると感嘆すると同時に、教員間の自由な意見交換の一つの形をみたように思う。

文献紹介と称しながら、内容についてはあまり触れなかった。それは下手な紹介で読む気を削いでしまうことを懸念したからである。関西は一步も二歩も進んでいる。中部も遅れじと地道な試みを重ねていく必要がある。

はじめに

第1部 大学授業研究の過去

第1章 大学の授業とは何か—改善の系譜—

第2部 大学授業研究の現在

第2章 学生の理解の枠組みをふまえた授業展開—教授技術論をのり越えるための視点

第3章 授業者はどのようにストレス—に対処しているのか—大学授業における教授者のストレス過程と自己成長—

第4章 「考える」力の育成をめざした授業の構造

第5章 大学教育への映像メディアの活用
—その実践と研究—

(9月30日まで

助教授 大学教育研究センター 副センター長)

第3部 大学授業研究の未来

(10月1日より 静岡大学 教授)

第6章 <総括>大学授業研究から大学教
育学へ

〔東信堂 2002年3月 2400円(税別)〕

各執筆者から第6章へのコメント